

# アジアを 読む

1

## 遅くなる香港人の歩行速度？ 活力維持への不安

れに揺れた香港の株式・不動産相場。当時のニュースなどの記憶が鮮明に蘇ってきた。この香港勤務後にアジア通貨危機下のシンガポール・マレーシアで特派員生活も経験したが、返還を控えた香港での取材ほど興味深かったものはなかった。

今回の2回目の香港赴任直前まではアジア担当の論説委員として社説を執筆していた。アジア経済・産業だけでなく、朝鮮半島問題、インド・パキスタン問題、インドネシアの民主化運動、昨年九月の米同時テロ事件とこれにからむアジアのイスラムの動きなども取材してきた。記者経験を通して感じていたアジアを読み解く視点やヒントを、この欄を借りてこれから紹介できたらと思う。

自己PRも兼ねた駄文のために紙数はほぼ尽きてしまったが、香港に再び着任して驚いたのは香港の人たちの歩行速度である。速いのではなく、以前に比べて格段に遅いのである。十数年前に初めて香港に勤務した時には、街を歩く香港人のせわしない歩き方に圧倒された記憶がある。歩道で背中を押されたり、エスカレーターで突き飛ばされそうになったりした経験は数知れない。歩くだけでその熱気に当てられて疲れたものだ。今ではとても考えられないが、タクシースピーの奪い合いもすさまじかった。タ

クシーに乗り込もうとドアの取っ手に触れたとたんに横からはじき飛ばされたことも1度や2度ではなかった。

香港の人たちの一挙一動に以前はエネルギーがあふれていた。今では人の行きかう姿に落ち着きがみられ、ドス黒かったビクトリア湾に青色が戻り、街も格段にきれいになった。景気の低迷というよりも、やはり香港が基本的に豊かになり、成熟化してきたということなのだろう。大手華人財閥の動きにも大陸への投資を先導した往事の素早さや大胆さが今ひとつみられない。華人企業に注目する者としては残念な点である。

都市国家は2000年と続かないのが歴史の教訓だと聞いたことがある。都市の成熟化、周辺地域の勃興に伴う活力の喪失がその要因らしい。中国南部の発展、上海の台頭というなかで香港はどう活力を維持していくのか。同じ都市国家のシンガポールも成熟化の壁に突き当たっている。リー・クアンユー上級相はじめ指導者層は国民への危機感の植え付けや国家大改造に忙しそうである。

香港はどうするのか。中国大陸の発展とともに外縁化への道を歩んでしまふのか。次回以降でこつした問題にも触れたいと思う。

(日経香港社社長 奥村幸広)

ここに1枚の写真がある。長江実業会長の李嘉誠氏がインタビュに応じている写真である。顔だけがクローズアップされた大きな写真だけに妙な迫力がある。2回目の香港勤務のために東京の自宅で資料を整理していたときに見つけた色あせた封筒のなかから出てきたものだ。

その封筒にはほかの香港経済界の大立者の写真も含まれていた。ワーフグループのピーター・ウー氏、シユガー・キングと呼ばれるケリーグループのロバート・ウオク氏、マカオのカジノ王として知られるスタンレー・ホー氏、東亜銀行頭取のデビッド・リー氏など、その数は50枚以上に及ぶ。

ジャーディン・マセソンの会長として辣腕を振るうたナイジェル・リッチ氏、李嘉誠グループの大番頭だったフランス傭兵部隊出身のサイモン・マレー氏、香港基本法の起草に大変な尽力をした今は亡き安子介氏、新空港建設計画などのインフラプロジェクトを立案して中国と激しく対立したウィルソン香港総督(パッテン総督の前任者)などのなかしい写真も混じっている。

日本経済新聞香港支局長として89年から3年間、取材に走り回った記念として思い出深い写真だけを保存していたものらしい。写真をみているうちに、89年の天安門事件直後に香港で行われた150万人デモ、事件の余波で大揺